

国際的資質を育成する社会科学習 (2)

—国際的資質を育成するカリキュラムの開発—

柳生 大輔 石原 直久 徳本 光哉 池野 範男
棚橋 健治 木村 博一

1. はじめに

世界のグローバル化が進み日本でも「国際化」があらゆる分野で進んでいる。そのような中、2005年の後半、日本は人口減少期の第1歩を歩み始めた。このことは、将来様々な分野で労働者の数が足りなくなり、外国人労働者を受け入れることにつながると考えられる。また、すでに日本に来て働いている日系ブラジル人などのニューカマーが抱える問題点なども指摘されており、改善に向けての取り組みが徐々にではあるが進められている。今後益々、日本国内で様々な文化が交じりあい、人と人がお互いを認め合いながら、共生の道を歩んでいかなければならない社会になっていくであろう。そのような社会の中で、生きていく人を「社会科」の授業でどのように育てていくのか。

本研究では、国際的資質(「国家や民族、人種などの違いを認め、人が人として存在するために、他者との関係を平和的に形成するために必要な人としての資質」)を育てることが急務であると考え、そのためには公正な思考・判断力も必要であり、具体的には「観察力」・「批判力」・「推力」・「社会的判断力」を高めることが重要であると考え。昨年度は、これらの力を基に国際的資質を育てるという視点やねらいをもった教材を用いて、本学園小・中学校において授業実践を行った。

本年度は昨年度とは異なる視点からのアプローチとして、社会科の地理的分野から多文化理解を深める授業開発を試みることにした。本実践は、試行段階ではあるが、教材開発の新たな可能性を提示したい。

2. 研究の目的・方法

2.1 多文化理解教育の位置づけ

日本の現状並びに将来の日本を見据えた時、私たち日本人は、日本以外の他の国・地域の文化について、

事実を理解し、寛容性を持ち、共生していくことのできる社会を作っていかなければならない。他国の文化を受け入れず、自国文化の優位性に基づいた他国との関係構築だけでは、日本は国際社会の中で生き残っていくことは出来ないのである。

つまり日本以外の他の国・地域の文化について、
○それぞれの文化には等しく価値があるものと見なせるために必要な、事実を理解する力。

○自分とは異なる生き方や考え方、価値観を認め、様々な文化に共感し、様々な文化を受容し、時にはデリケートな問題がゆえに生じる文化摩擦にも負けない忍耐と寛容性。

○様々な文化を背景に持つ人々と共生していくことのできる実践力。

を育成することが、多文化理解教育だと考える。このことは、外国の文化を理解するだけではなく、日本国内で日常生活を送る中で生じる様々な問題を解決する力にもつながるのである。多文化理解教育は、一つの教科だけで達成することはできず、教育課程全体を通して実施していかなければならない。だから、学校の教育課程の中で様々な教科活動を通して実践がなされている。広島大学附属三原学園においても、幼少中一貫カリキュラムとして、新領域「国際コミュニケーション」の学習開発を進めており、中学校においては、「グローバル・シティズンシップの時間」として全学年に位置付けている。具体的には、ザンビアの交流相手校とサッカーボール交換プロジェクトを行ったり、日本の民話を英語に訳しデジタル絵本を制作しインターネットを使って交流していくなど、多文化理解の実践力育成をめざす授業としての役割を果たしている。このように、様々な教科からの取り組みがあって、はじめて多文化理解教育が結実していくのである。では、社会科という教科は、どのように多文化理解教育にア

ブローチしていくことができるのであろうか。

2. 2 中学校社会科（地理的分野）における多文化理解教育のすすめ方

中学校社会科は、地理的分野・歴史的分野・公民的分野から構成されているが、本稿では世界の諸事象に多くふれることのできる地理的分野に焦点をしばって多文化理解教育とのつながりを見ていくことにする。中学校学習指導要領（平成10年12月解説一社会編一）を読むと、社会科の授業を進めていくことと、多文化教育を進めていくことが相互に関係しあうということが分かる。

指導要領のいう、学校教育のねらいとは、生徒に「生きる力」を育成することである。そして、「生きる力」とは具体的に以下の3つを表す。

○豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚。

○自ら学び、自ら考える力。

○基礎・基本の確実な定着による確かな学力。

このことを社会科（学習指導要領より）の視点と対応させると、

○豊かな人間性や社会性を備え、国際社会に主体的に生きる日本人としての資質や能力を広い視野に立った、社会認識を通して育成すること。

○基礎・基本を大切に、「学び方を学ぶ」学習の充実を図ること。

○基礎・基本を大切にして、確かな学力を身につけること。

の3つにつながるものと言える。社会科における「豊かな人間性を備える」ということが、多文化理解教育において「価値観を認めること、共感、受容、忍耐、寛容性」の育成に、また同様に「学び方を学ぶ」学習が「共生に向けての実践力」に、「確かな学力を身につける」ことが「事実を理解する力」につながるのである。学習指導要領の社会科の目標、ならびに地理的分野の目標を達成するために、授業開発をし、それらを実践していくことが、多文化理解教育を進めることにつながるものと考え。そうであるならば多文化理解教育を進めていく上で大切なことは、実際に日常の授業の中で行われている教育活動の内容の吟味が必要になってくる。つまり、社会科の視点を進める上で多文化理解教育につながることを意識して授業に臨んでいるのかということである。意識が明確にならないと焦点化ができなくなるからである。様々な先考事例を研究した時に、多文化理解教育を進める上で以下の視点をより意識した授業開発が必要であると考え。

○社会科の地理的分野は、「学び方を学ぶ」学習が中心

となっており、普段の授業はその事例を学ぶ場となっている。学んだ事例を実践することが少ないという現状がある。よって継続的に実践する機会を設けなければならない。ただし、年間の授業時数が決まっており、なかなか時間を見いだせないため、多文化理解のための学習問題の提示という形で、家庭学習を通常の授業に活用する。

○多文化理解とは、最終的に一人ひとりが相手と関わる中で、相手を理解することである。人間の営みが大変重要なのである。社会科の地理的分野の学習内容では、地域の環境条件や他地域との結びつきについては理解できても、そこで生活をしている人々の姿がなかなかイメージされにくい。よって、多文化理解に必要な人々の姿を感じ取り、そこに住む人間に興味・関心を持てるような授業開発にも取り組む。

○多文化理解を進めるには、広い視野に立って事象を複眼的に見たり、何度も思考の再構成をしなければならない。その際に有効な学習スタイルが、複数の人たちによる協同思考による追究活動である。知識や技能を覚えることももちろん大切であるが、同時に共通の目的に向かって他者と関わりながら習得した知識や技能を生かし新たなものを作り出していく力をつけることも大切である。言い換えれば従来の社会科の4観点からなる教科学力を身に付けた上で、それらを生かしながら、多文化理解の先にある多文化共生社会の実現という新しい文化を子ども達が協同で創造していくような力を育てることが重要だと考える。

以上のことを実践するためには、学習場面を適宜設定することが必要である。学習場面は系統的・継続的に行わなければ、1回の学習だけでは多文化理解には繋がらないのである。

今回は、中学校社会科の地理的分野に焦点をしばって述べてきたが、地理的分野で学習したことは、歴史的分野で培われた学力とともに、教科の関連性から考えて公民的分野でも活かされてくるものと考え。今回提示する授業は、多文化理解を進めるにあたって、通常の授業で学んだことを活かすると同時に、通常の授業へより興味・関心を持てるための基礎となる力を身に付けるためのものである。

多文化理解教育とは、学校教育の中で社会科だけで力がつくものではない。すべての教科の教科学力の総体として多文化理解力が備わり、ひいては、より実践的な力としての多文化共生力がつくものと考え。そのような中で、社会科として何ができるのかということを経験した授業開発が必要であると考え。学校現場においては、卒業段階における進路

保障の観点から、地理・歴史・公民の基本的学力を身に付けさせなければならない。教科書の基本的事項を理解させることと、かといって無味乾燥な知識・理解を中心とした授業にならないような工夫の間で多くの教員が頭を悩ましているのが現状ではないだろうか。

本稿の目的は、通常カリキュラムにおける社会科の授業で学んだことを多文化理解に関する課題学習につなげたり、その課題学習を通して知り得た事柄をまた通常の社会科の授業に活かしたりという双方向的な学習を通して、多文化理解力・多文化共生力を育成する

授業開発を提案していきたい。

2. 3 授業の構成

授業開発の目的にそって、社会科の地理的分野に関する課題を調べ、まとめて交流していく形で授業を構成するものとする。授業は課題学習としてワークシート(「多文化理解シート」図1)を配布し、まとめていくようにする。課題としては、授業者の方から提示する題材と、生徒自らが選んだ題材(長期休業中などを利用する)の両方を活用していく。

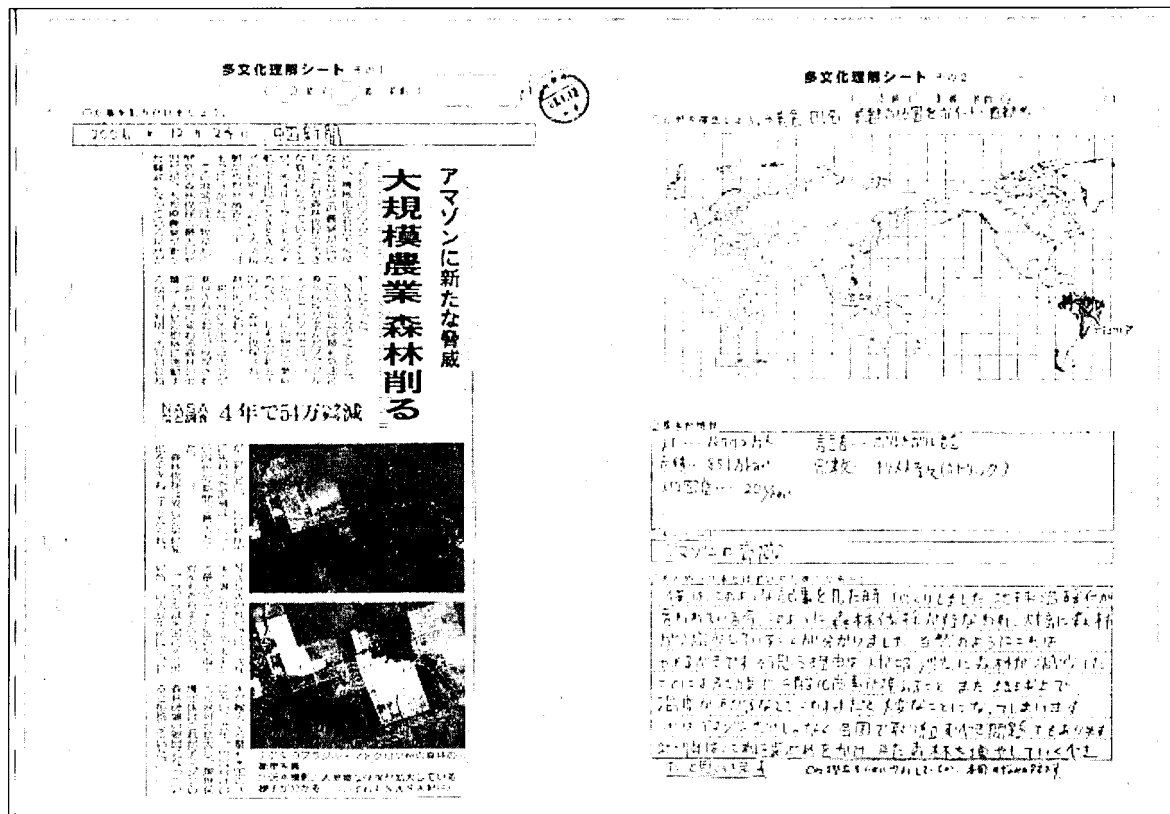


図1 多文化理解シート

【授業を進める中での生徒の動き】

- ①授業者から提示された資料(表1)を読み、地図帳や資料集、インターネット等を利用しながら、課題を自分の言葉でまとめていく。長期休業中の課題の場合は、その期間中の新聞の記事の中から自ら選択したものについて、上記と同様の作業を行う。なお、課題となった国に関する基本的事項(位置、首都名とその位置、人口、人口密度、言語、人種、宗教など)についても調べる。
- ②調べたことを指定された日に提出し、教師のコメントをもらい、その後ファイルに綴じる。(評価として

ポートフォリオを利用する)

- ③定期的に交流会を行い、自分以外の人達の意見・考えに触れて自分の考えと比較・検討する。多様な見方・考え方の育成につながる。
- 【教師の準備および姿勢】
- ①地理・歴史・公民分野すべてを見通して、関連性のあるテーマを見つけること。
 - ②多文化理解にとって、最も有効な身近な資料として新聞を利用する。NIE活動を社会科の授業に活かしていきたい。そのため、3紙くらいを読んで資料収集に努めなければならない。また、場合によって

は映像も利用することになるので、テレビ欄をチェックし、ビデオ等に収録しておくことも必要である。

③生徒が提出したワークシートに対してコメントを書くとき、生徒の負担になりすぎないように配慮するとともに、受容的態度で記入し、生徒の興味・関心が持続できるようにする。

2. 4 授業の実際と展望

生徒達は、授業者から提示された課題と、新聞の中から自ら選んだ題材について課題の両方に取り組んでいる。これらの取り組みが継続的に続けられることが大切である。通常の学習の学びの振り返りになり、また技能の習得や思考の深化につながるものとする。指定題材は、これらの系統的な学習のアクセントとなり、また自ら選んだ題材は今までの学習を活かしながらより発展的な学習につながり、社会的判断力の育成にも通じていくと考えられる。

これら一連の学習過程の中で、さらに次のような学習サイクルが行われていく。つまり地理的分野の既習内容をスタートとして、新聞記事の内容から興味・関心のあるものを選択し、そこに書かれていることを読み解き（読解力）、その内容を自分の言葉でわかりやすく表現し、まとめたシートをもとに交流を通してさらに自分の国際的資質を高め多文化理解を進める原動力にしていく、というものである。これらが両輪になってはじめて本研究のねらいが達成されるものと考えられる。

では、具体的に生徒達はどのような新聞記事を自ら選択したのであろうか。最近作成した多文化理解シートを集計すると、表2のような結果となった。選択した国を州単位で分類すると、アジア州が過半数を占めた。生徒たちにとってアジアがより身近な地域であると考えられるが、それ以上に生徒が調べた時期の世界情勢との関連が強いと考えられる。例えば今回アジア州で最も取り上げられた国はイラクであった。多文化理解シートの中の生徒のキーワードとしては、次のようなものが挙げられた。

『イラク増派、反米勢力、テロ、フセイン元大統領、フセイン元大統領死刑、アラブの英雄がアラブの孤立者へ…』

生徒の選択の類型としては、いくつかの傾向が分かった。

テレビで、何度も映像が流される情報に興味を持ち、その内容を新聞で選択した生徒が多くいた。世の中の動きに敏感なタイプといえる。これはインドネシアの津波や中国の経済発展、北朝鮮の核問題などを選択し

た生徒に見られた。

自分の興味・関心のある内容から新聞記事の選択を行った生徒もいた。例えば、地球温暖化についてブラジルのエタノールガソリンについて取り上げたものである。

その他は、直感的に新聞記事を選択した場合である。

それぞれ選択の仕方は違っても、方向としては多文化理解に向かうものである。

生徒が書いた内容を以下に紹介する。

○北朝鮮は核の研究をどんどん進めています。日本では非核三原則があり、絶対に核は持たない。武力で国を保つ時代はもうやめにして、これからは言葉でのコミュニケーションを大切にすべきだと思います。そうすれば誰一人血を流すことはありません。北朝鮮の核実験を止めさせるために、今の日本が一番力を入れるべきは「外交」だと思います。

【キーワード：「北」の核の脅威を排除せよ】

○スマトラ沖地震から2年たち、どのようになったのか見てみると、都市はほぼ回復し活気があふれているが、地方はいまだに回復していない。このことを受けてまず地方の回復を優先的にすることが必要だと思う。その理由は都市にホテルなどを作る前に全地方を元通りにし、人々が暮らせる状況にし、それからホテルなどを作るべきだと思う。政府は地方をほったらかしにせず、まず人々の安全に暮らす場所を確保し、暮らしを優先するべきだと思う。これができるはじめてスマトラ沖地震から回復したと言えるのではないだろうか。

【キーワード：スマトラ沖地震】

表2の結果をふまえて、取り上げられる割合が少なくとも、日本との関係上是非理解してもらいたい国に関するものや、社会科の内容として必要なものを、授業者の提示した題材に組み込みながら、地域的にバランスがとれた内容構成にしていきたい。

外国で起こったことについて、事実を認識し、自分の考えを持ち、自分の言葉で意見を述べるという一連の活動を引き続き行い、交流会で自分の見方・考え方を再構成しながら、生徒の国際的資質の育成のための授業実践を行っていきたい。

表1 授業者から提示した題材の例

| 回 | 課題内容 | 多文化理解の視点 |
|---|--|--|
| 1 | <p>資料①「植林80万本夢追う日系博士」</p> <p>○ 世界最貧国の1つ、アフリカ東部のエリトリアで、マングローブの植林を行っている日系米国人の生化学者ゴードン・ヒサシ・サトウ博士の農村開発に取り組む姿をまとめた内容。 (朝日新聞2006年2月10日付)</p> | <p>(1) 事実の認識</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エリトリアの位置。エリトリアと日本の関係。 ・サトウ博士が現地で行ったこと。 <p>(2) 実践の認識</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サトウ博士の実践にせまる。エリトリアの人たちの思いをつかむ。 <p>(3) 社会科からの視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・南北問題，食糧問題，環境問題。 |
| 2 | <p>資料②「中国渡航の臓器移植急増」</p> <p>○ 中国で腎臓や肝臓の移植手術を受ける日本人が急増している。中国の医療水準の進歩してきていること、日本とは違い比較的容易に手術が受けられることが主な要因である。しかし、臓器提供者の多くが死刑囚であり法的な問題も抱えているという内容。 (朝日新聞2006年2月4日付)</p> | <p>(1) 事実の認識</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中国の位置と中国と日本の関係。 ・日本人の現地での移植実態。 <p>(2) 実践の認識</p> <ul style="list-style-type: none"> ・臓器移植の現実をどう考えるのか。 <p>(3) 社会科からの視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・臓器移植について。 ・基本的人権や裁判制度。 |
| 3 | <p>資料③「NYの中国移民託児施設不足」</p> <p>○ 中国からアメリカへ渡った移民は低賃金労働に就きがちで、夫婦共働きでなくては暮らしていけない。</p> <p>しかし、共働きをするためには子どもを預けなければならないが、子どもを預ける施設が不足しており、そのため赤ちゃんを自分の母国である中国へ、単身帰国させることが増えているという内容。 (朝日新聞2006年1月24日付)</p> | <p>(1) 事実の認識</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アメリカの位置。アメリカと日本の関係。 ・アメリカにおける移民の実態。 <p>(2) 実践の認識</p> <ul style="list-style-type: none"> ・移民社会のかかえる問題をどうとらえるのか。 <p>(3) 社会科からの視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外国人労働者問題，移民問題。 ・少子高齢化。 |
| 4 | <p>資料④「肌の色より愛」</p> <p>○ アパルトヘイト終結後も残っている偏見について、反アパルトヘイト運動家を父にもつダリさんと、イギリス人音楽家の母とポーランド人技術者の父をもつレイチェルさんの結婚を通して、南アフリカの現状について考える内容。 (読売新聞2006年1月21日付)</p> | <p>(1) 事実の認識</p> <ul style="list-style-type: none"> ・南アフリカの位置。南アフリカと日本の関係。 ・南アフリカにおける人種問題。 <p>(2) 実践の認識</p> <ul style="list-style-type: none"> ・南ア共和国の社会構造の変化の中に見えることは何で、それをどう考えるのか。 <p>(3) 社会科における視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人種問題，民族問題。 ・基本的人権の尊重。 |

表2【自分で選んだ題材の選択例】

| アジア州 | ヨーロッパ州 | アフリカ州 | 北アメリカ州 | 南アメリカ州 | オセアニア州 |
|--|--|--|--------------|----------------|---------|
| イラク, 中国, タイ, 北朝鮮, 台湾, インドネシ ア, イラン, インド, 韓国, ラオス, スリラン カ, エジプト, アフガニスタン | フランス, ルクセンブルク, イギリス, デンマーク領グ リーンランド, ロシア, バチカン市国, ドイツ | ブルンジ, コンゴ, ソマリア, ナイジェリア, ケニア | アメリカ, カナダ | ブラジル, コロンビア | オーストラリア |
| 51% | 21% | 10% | 13% | 4% | 1% |

※国名は、多く取り上げられた順。下の%は全体に占める割合を示している。太字は上位3カ国。提出は冬休み後に行った。(提出総数123:複数回答可)

ここで取り上げる指導案は、生徒自らが選んだ題材の中からこれらと思うものを1つ選択し、お互いに紹介しあう交流会のものである。

●単元『飛び出せ!世界の国々へ』

【単元の目標】

- 生徒一人ひとりがおこなってきた学習課題から、自分と他者の多文化理解のとらえ方の比較を行い同意点・相違点から自分自身の思考を再構成し多文化理解を深めることができるようにする。
- 疑問に思ったことなどを交流することによってコミュニケーション力を身に付けることができるようにする。

第1次 交流に向けての準備・・・1時間

第2次 交流学习・・・・・・・・・・1時間

【授業の目標】

第1次

- 自分が調べた国で何が、どのような原因で起こり、その国の人々はどうに思い、考えているのかを読み取る。
- 自分の言葉で相手にわかりやすく表現する。

第2次

- 交流学习を通して、発表をしっかりと聞き、思考を再構成し多文化理解を深める。
- コミュニケーション力を身に付ける。

【第1次】

| 学習事項 | 生徒の活動 | 教師の働きかけとねらい | (集団) |
|-----------|---|-------------------------------------|--------------------------|
| 1 学習課題の確認 | (1) 学習課題を確認する。 自分の決めた国(テーマ)について、相手にわかりやすくまとめる。 | ①この時間内で、発表するための内容原稿を完成させるよう、働きかける。 | 【全】 全員への指示を徹底させる。 |
| 2 学習課題の追求 | (2) 発表時間を意識しながら、自分の伝えたいことをまとめる。 | ②机間巡視をしながら、アドバイスをしていく。 | 【全】 聞く人の立場に立った内容にさせる。 |
| 3 次の時の確認 | (3) 次の時間の学習の流れを確認する。 | ③準備物など忘れないよう指示する。また、練習も行っておくことを伝える。 | 【全】 全員への指示を徹底させる。 |

【第2次】

| 学習事項 | 生徒の活動 | 教師の働きかけとねらい | (集団) |
|-----------|--|--|-------------------------|
| 1 前時の想起 | (1) 資料の確認をする。 ・自分の発表原稿 ・授業用ワークシート | ①本時の学習で使用する資料の確認をさせる。 | 【全】 学習への気持ちをつくらせる。 |
| 2 学習課題の確認 | (2) 学習課題を確認する。 自分のテーマについてまとめた内容を、学習班の中で交流する。 | ②今までの学習を活かすことを指示する。 | 【全】 全員への指示を徹底させる。 |
| 3 学習課題の追求 | (3) 発表会を行う。 ・発表を聞いて、自分の考えや感想を付箋紙に書く。 ・一番興味・関心がわいた作品を選び、その理由を発表する。 (4) 自分とは違う見方や意見、考えを大切に、自分の言葉でもう一度考えを再構成しまとめる。 | ③発表者には、自分の発表に対する周りの生徒の考えや思いをまずは肯定的に受け取らせる。聞く側の生徒には自分の考えをしっかりと相手に伝えるような表現をするように指示する。 ④これからの活動をする上で多角的に事実に向き合う姿勢の大切さを伝える。 | 【個】 机間巡視をしながら、助言をする。 |
| 4 学習のまとめ | (5) 原稿をまとめる。 ・今回の原稿を冊子にする。 | ⑤他の班の発表原稿も見ておくように指示する。 ・読んでみて、感想や意見があれば作成者にメッセージを送るよう指示する。 | 【全】 全員へ指示する。 |

(参考文献)

- 1) 文部科学省『中学校学習指導要領(平成10年12月)解説社会編』大阪：大阪書籍，2004年
- 2) ジェームズ・A・ハンクス他『民主主義と多文化教育』東京：明石書店，2006年
- 3) 金沢吉展『異文化とつき合うための心理学』東京：誠信書房，2001年
- 4) 中村水名子『多民族・多文化共生の明日を拓く社会科授業』東京：三一書房，2002年
- 5) 澁澤文隆『中学校社会科新地理学習の方向と展開』東京：明治図書，2002年
- 6) 北俊夫『社会科学習問題づくりのアイデア』東京：明治図書，2004年
- 7) 山口幸男・清水幸男編『これが新しい地理授業の現場だ』東京：古今書院，2005年
- 8) ポーラ・A・コルデイロ他『多文化・人権教育学校をつくる』東京：明石書店，2003年
- 9) 柳生大輔，村上忠君，石原直久，池野範男，棚橋健治，木村博一「国際的資質を育成する社会科学習(1)」，広島大学学部・附属共同研究紀要，第34号，2006
- 10) 広島大学附属三原学園編著(2005)「21世紀型“読み・書き・算”カリキュラムの開発」